

末黒野 平成二十五年二月五日発行 第六十八巻第二号（通巻七九八号）

末黒野

すぐろの

2月号
(通巻798号)

石 路 の 花

小川玉泉

帰り花三階越ゆる枝の先
大石に産地の名札石路の花
大石を随所に個の冬紅葉
飛び石を行く人に慣れ池の鴨

綿虫のゆるりと過ぎぬ池平ら
松手入れ済みたる小島鷺遊ぶ
冬ぬくし木釘の弛む園の卓
甲 高き鳥声園の冬芒
雪吊の松の根方を歩む鷺
大石に古池の匂や苑枯れて
嘴の向き思ひおもひの浮寝鳥
築山の径に灯の入り日の短か

波郷忌

松本三千夫

波音にははのこゑ聴く十三夜
家ごとに橋を渡せり後の月
夜寒さを洋酒の壇の琥珀色
鍵盤の黒は半音朝の冷え
笛鳴や大仏は背の窓開けて
直なるはなき島の径石露の花
日溜りは落葉だまりや蟹の路地
街騒の届かぬ団地青木の実
枯芝や降りて雀の枯色に
波郷忌の粥啜りをり朝の鴉
本の耳折りて閉ぢけり冬灯
土牢の太き格子や寒潜み

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

秋声

大橋伊佐子

反論は胸にしまひぬ秋扇
蓑虫の貌をのぞかず日和かな
敗荷の影宿す水なかりけり
才もなく凡に生きけり文化の日
一服の間も見上げをり松手入
湖西線時雨の奥へ消えにけり
水鳥の夕影落す浮御堂
秋声や竹は緑に詩仙堂
行く秋の心に落つる添水かな
石庭の静寂に秋を惜しみけり

十三夜

黒滝志麻子

戸障子の音の増えゆく秋の暮
賞の差のしかと分らぬ菊花展
晴れ晴れと戦場ヶ原鳥渡る
黄落の中や真白き美術館
魯田に残んの夕日ありにけり
灯台の点りて霧の深さかな
垣間見る湖の碧さや紅葉晴
熟れ柿や朝日差し込む連子窓
岬へと色を連ねて草の花
蔵町の大屋根続く十三夜



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

白南天 加藤静江

夕茜褪せゆく早さ島の秋
廃屋のコスモス風に逆らはず
病窓の果てなく青し秋の空
虫の音の途切れがちなる夜の深み
秋の日のすべり落ちたる大薨
寂しさを呼び満開の秋薔薇
白南天池の湧水豊かなる

照紅葉 菅野日出子

激つ瀬のうながす紅葉散る黄葉
鏡なすダムを縁取り照紅葉
たたなはる嶺七色に紅葉晴
夕映えの包む山肌照紅葉
魯田に日の燦々と群雀
耳澄ます鳴き籠の声秋冷ゆる
オレンジに染まる遠嶺や秋入日



木守柿

菅野蒔子

鶉の声

熊切光子

朝の空澄めり八十路の一日目
柿挽いで日暮にはかに早まりぬ
夕さればつのる淋しさ木守柿
一樹のみ夕日に点る木守柿
栗駒の頂浮かぶ冬霞
白鳥のいつも一羽の訳は何
毛糸編み寝仕度の刻忘れけり

一天の瑠璃色ふかむ鶉の声
櫃の實の記憶さだかに湯坂道
暮れてなほうねりゆたかや芒原
断層の竹の根あらはそぞろ寒
冷まじや渚に埋もれ捨て小舟
陶工の無言を通し冬の虻
小春日の雀こぼるる神の庭

十三夜

城戸

緑

紅葉晴

堺

昌子

後の月回覧板の回り来し
今一度仰ぎて寝ねむ十三夜
日暮来る銀杏黄葉の大通り
峡の村銀杏黄葉を要とす
古池の句碑に散りつぐ色葉かな
この園に散るほかはなき黄葉かな
羽ばたける音のしきりや鴨日和

落葉松の黄葉降る径鳥の声
夕照の湖畔の紅葉綾なせり
照る山と日陰る山と紅葉晴
岬鼻の色無き風に吹かれをり
湯の町のこけし工房小鳥来る
秋寂ぶや男体山は湖いだき
よちよちと落葉追ふ児やつむじ風

青炎集

横浜 高橋定峰

晩秋の波の穂立ちぬ九十九里
木犀や園児の列の乱れなく
遠き日に住みし本郷銀杏散る
霧うねる溶岩肌荒き富士の裾
木犀の香りをまとひ始発バス
湯豆腐のをどり初めたる土鍋かな

横浜 田村加代

今年又夫の遺愛の菊薫る
箒目に木犀こぼれ庫裡の庭
着水の鴨の水輪の重なりぬ
鳥声やはき日差しの実千両
帰り花愛でて深むる詩ごころ
花枇杷や空家の主は今いづこ

小川玉泉選

横浜 川村亘子

昨夜までの虫の音あらず闇深し
船笛や名残の月の見え隠れ
岬鼻の鮎色の月鷹渡る
潮の香の満ち来る渚暮早し
沖暮れて残る漁火一の酉
鳶の輪の大きく回り神迎

横浜 山崎稔子

巻雲の二筋三筋秋澄めり
木洩れ日の敷石道や栗の毬
ゆくりなく出合ひぬ終の葛の花
雲迅し谷地の櫓の出揃ひぬ
なかなかに選句進まず虫の闇
立冬を忘るる強き日差しかな



菊日和境内巡る車椅子

横浜 上月智子

水かけて息吹き返す疎抜き菜

幼木のわづかな桜紅葉かな

名刹の櫓にまとひ葛紅葉

切り口の松脂白し暮の秋

老犬のか細き声や冬近し

横浜 神谷さうび

大文字草大を斜めにまつすぐに

萍の紅葉しそめて水平ら

あかあかと高嶺の花や烏瓜

谷川へ幹ごと傾ぐ照葉かな

たをやかや風に応へて花すすき

萩は実に借りて久しき本開く

横浜 小山ほ子

本尊に供ふ白菊開山忌

金風や緋衣に就く僧の列

冬うちら凜と首立て鷺一羽

名刹の寂を深むる冬紅葉

着せ替への人形に着せ冬羽織

西陣の古帯活かしちやんちやんこ

朝冷や衿立てて待つ始発バス

横浜 占部美弥子

蒼天の戦場ヶ原草紅葉

岳樺の続く山道秋澄めり

初雁や岬に声を落し過ぐ

晩秋や漫ろ歩きのペアルック

恙なき夫と読書の秋日和

横浜 塚越弥栄子

己が色深めて終の庭紅葉

草紅葉青き匂ひの少しあり

ゆきずりの吾も言祝ぐ七五三

離れては又触れ合へる鴨の水尾

鴨の声走り池面に水尾を引く

境内を朱く染めたる散り紅葉

横須賀 福田禎子

流れ行く水の迅さや溪紅葉

蒼天の天守仰ぐや雁渡る

色変へぬ松や天守の鯨の反り

城塞に米倉跡や小鳥来る

冬麗や夕日塗れの戻り船

好日の銅門や返り花

耕 土 集

松本三千夫選



物干に吊し柿して家居かな

晩照や白粉花の匂ひくる

霧島やえびね色なる薄原

老を知ることより始む冬ま度

寒蟬の二氣に熄みし静寂かな

日野 中村 月代

稲妻を組む生徒へ終り告ぐる笛

人声も運びて風の秋桜

遠富士や音符のごとく柿し

町中を霽包みこむ冬立つ日

木の葉散る庵に猫の出入口

草加 泉 和美

教云の墓前礼拝虫時雨

どんぐりの転がる如く老いにけり

庭隅の山茶花の白際立ちぬ

模様編みの本にくぎづけ毛糸編む

丹沢の麓の宿や初時雨

横浜 芝 孝子

紫蘇の実を扱きし手に受く速達便

整ひし旅行鞆や神の留守

会心の切干し莫産に陽を集め

角を振り歩む赤牛大枯樹

寢床より夫の無心や玉子酒

宮城 門間としゑ

壁倒立てきて団栗こぼしけり

目元から翳り始めぬ菊の姫

欠札の便り来はじむ初時雨

店頭の百円古書や枯葉舞ふ

差し差ぎこれ生国語のおでん酒

石井 勇

命名の墨跡豊か菊薫る

治水として護岸の野菊刈られけり

鱧士され仰天の日に鱷雲

紅葉掃く横にねかせて高箒

武蔵野に黄の蝶の舞ふ小春かな

新宿 浅岡 麻實